第Ⅲ部　研究の総括







最終年次研究のまとめ

1　はじめに

３か年研究の最終年次における成果と課題をまとめるために、二つの調査結果の変遷を見ていくことにする。一つ目は、学校評価における本研究に関係する質問事項への回答結果（３年次は前期の結果）である。３か年という長い期間での変化を見取るためにこれを用いる。二つ目は、ScTN（スクタン）における本研究に関係する質問事項への回答結果である。本校では、MEXCBT（メクビット）にアクセスする学習ｅポータルの付加機能である質問紙調査（ScTN）を用いて、生徒たちに自己評価をさせている。この質問紙調査では、教育学や心理学等の理論に基づいて設定された質問に答えることで、学校教育の経験を通して生徒がどのように変容したかを確認することができる。３年目の短い期間での変化を見取るためにこれを用いる。これらの変遷を踏まえた上で、成果と課題を述べることにする。なお、以下に示す資料１・２における「肯定率」は、４件法評価のうち、肯定的な回答の割合である。

2　調査の結果

(1)　学校評価について

学校評価の質問項目は多岐に渡るため、「自ら学び考える学習活動の推進」と「主体的・対話的で深い学びの視点に立った授業改善」という大項目の中から、本研究に関係するものを抽出して示す。

		評価指標	生徒	保護者	教員
自ら学び考える学習活動の推進	学ぶ楽しさと知の創造	１年次　課題を自分ごととして捉え、主体的に課題解決に取り組む学習活動を通して、知識や経験を広げ、学ぶ楽しさを味わっている。	肯定率 94%	肯定率 93%	肯定率 100%
		２年次　課題を自分ごととして捉え、主体的に課題解決に取り組む学習活動を通して、知識や経験を広げ、学ぶ楽しさを味わっている。	肯定率 93%	肯定率 94%	肯定率 85%
		３年次　課題を自分ごととして捉え、主体的に課題解決に取り組む学習活動を通して、知識や経験を広げ、学ぶ楽しさを味わっている。	肯定率 94%	肯定率 94%	肯定率 75%
	授業で実感する自己の成長	１年次　自ら課題を見いだし、見通しを持って課題解決に取り組み、振り返る学習活動を通して、自らの成長を実感している。	肯定率 87%	肯定率 89%	肯定率 85%
		２年次　自ら課題を見いだし、見通しを持って課題解決に取り組み、メタ認知力（自分の思考や行動を客観的に把握する力）を発揮しながら振り返る学習活動を通して、自らの成長を実感している。	肯定率 86%	肯定率 90%	肯定率 75%
		３年次　自ら課題を見いだし、見通しを持って課題解決に取り組み、メタ認知力（自分の思考や行動を客観的に把握し認識する力）を発揮しながら振り返る学習活動を通して、自らの成長を実感している。	肯定率 90%	肯定率 93%	肯定率 80%

		評価指標	生徒	保護者	教員
主体的・対話的で深い学びの視点に立った授業改善	自己の成長を実感する授業	1年次 個々の良い点や可能性を見付けて積極的に評価し、学習の意義や価値を実感できるようにしている。	肯定率 78%	肯定率 92%	肯定率 75%
		2年次 生徒がメタ認知力（自分の思考や行動を客観的に把握する力）を発揮して、自己の成長を実感することができる授業の充実を図っている。	肯定率 85%	肯定率 91%	肯定率 85%
		3年次 生徒がメタ認知力（自分の思考や行動を客観的に把握し認識する力）を発揮しながら、自己の成長を実感することができる授業の充実を図っている。	肯定率 88%	肯定率 89%	肯定率 75%
	学びを他に生かす経験	1年次 教科等で学んだことを、学習や生活の様々な課題解決に生かす機会を設けている。	肯定率 91%	肯定率 86%	肯定率 75%
		2年次 教科等で学んだことを、学習や生活の様々な課題解決に生かす機会を設けている。	肯定率 90%	肯定率 85%	肯定率 85%
		3年次 教科等で学んだことを、学習や生活の様々な課題解決に生かす機会を設けている。	肯定率 91%	肯定率 86%	肯定率 75%

資料1　学校評価の結果

学校評価の結果を研究主題のキーワードであるエージェンシーと、副主題のキーワードであるメタ認知力という二つの視点から整理したい。

一つ目は、エージェンシーという視点からである。「学ぶ楽しさと知の創造」は、「課題を自分事として捉え、主体的に課題解決に取り組む」という文言から、自らの学びを自ら形作ることを想定していることが分かる。また、「学びを他に生かす経験」は、学習や生活の様々な課題解決に生かすという文言から、学びを集団や社会に役立てることを想定していることが分かる。したがって、これらは研究主題のエージェンシーに関わる項目であると言える。

「学ぶ楽しさと知の創造」の肯定率は、生徒も保護者も3か年 90%を超えて高い数値を維持している。一方で、教員の肯定率は年を重ねるごとに下がっているのが特徴として表れている。また、「学びを他に生かす経験」の肯定率も、生徒が90%、保護者が80%と高い数値を維持している。一方で、こちらも教員の肯定率が70%～80%を行き来しているという特徴が出ている。

二つ目は、メタ認知力という視点からである。「授業で実感する自己の成長」と「自己の成長を実感する授業」は、評価指標の中にメタ認知力という文言が入っており、副主題と関わる項目であることが分かる。

「授業で実感する自己の成長」の肯定率は、生徒も保護者も1年次の80%から少しずつ上昇し、3年次には90%に到達している。一方で、教員の肯定率についてはエージェンシーに関する項目同様、70%～80%を行き来している。「自己の成長を実感する授業」は、生徒の肯定率が10%上昇しており、一番大きく変動した項目であると言える。また、保護者の肯定率も9割近くであり、高い水準を維持している。ただし、やはり教員の肯定率は70%～80%を行き来しているという結果になっている。

(2) 質問紙調査（ScTN）について

質問紙調査は、「学校教育の経験」「成長」「学校教育の成果の実感」という大きく三つの大項目に分類されている。これは、学校での学びの経験が生徒の成長と結び付いているかを見取るためである。質問項目は多岐に渡るため、本研究に関係するものを抽出して示す。「はじめに」で述べたとおり、３年目の変容を客観的に捉えるために用いた。

	質問項目	５月調査	１０月調査
A 学校教育の経験	①授業では、「授業を進めるのは、先生ではなくて、自分だ」と思いながら学んでいる。	肯定率 51%	肯定率 62%
	②授業では、自分の興味や関心に基づいて、自分なりに問いや課題を立てて学んでいる。	肯定率 73%	肯定率 77%
	③授業では、挑戦と失敗を繰り返しながら、問いや課題の解決に取り組んでいる。	肯定率 80%	肯定率 80%
B 成長	①新しいことを学んで身に付けようとするとき、自分で目標や計画を立てて学習をやり遂げることができる。	肯定率 78%	肯定率 78%
	②一人で学んでいて、解決できない問いや課題に出合っても、できるまで自分なりにやり続けている。	肯定率 78%	肯定率 80%
C 学校教育の成果の実感	①授業で学ぶことによって、毎日の生活を自分でよりよくするために、できることが増えている。	肯定率 77%	肯定率 82%

資料２　質問紙調査の結果

質問紙調査の結果を研究主題のキーワードであるエージェンシーと、副主題のキーワードであるメタ認知力という二つの視点から整理したい。

一つ目は、エージェンシーという視点からである。資料２のＡ①とＡ②の項目は、「授業を進めるのは、先生ではなくて、自分だ」「自分なりに問いや課題を立てて」という文言から、自らの学びを自ら形作ることを想定していることが分かる。また、資料２のＣ①は、「自分でよりよくする」という文言から、学びを生かして現状をよりよくすることを想定していることが分かる。したがって、これらは研究主題のエージェンシーに関わる項目であると言える。

資料２のＡ①の項目は、肯定率が 50%から 60%に上昇している。また、資料２のＡ②の項目は、肯定率が若干上昇している。そして、資料２のＣ①の項目は、肯定率が 70%から 80%に上昇している。

二つ目は、メタ認知力という視点からである。資料２のＡ③項目は、「挑戦と失敗を繰り返しながら」という文言から、学びを修正することを想定していることが分かる。また、資料２のＢ①とＢ②の項目は、「自分で計画や目標を立てて」「できるまで自分なりにやり続けている」という文言から、自分の現状を客観的に把握したり、意識的に調整したりしながら、粘り強く取り組むことが想定されていることが分かる。したがって、これらはメタ認知力に関わる項目であると言える。

資料２のＡ③の項目は、肯定率が 80%台を維持している。また、資料２のＢ①の項目は、肯定率が 70%台を維持している。そして、資料２のＢ②の項目は、肯定率が 70%台から 80%へと若干上昇している。

3　考察

(1)　学校評価から

研究主題であるエージェンシーと副主題であるメタ認知力の二つの視点から考察したい。

まず、エージェンシーについてである。生徒の肯定率は、３か年を通じて 90%を超える高い数値を維持している。保護者の肯定率も、80%後半～90%と良好な結果を得ている。自分で目標を設定し、振り返り、責任を持って行動する力を育むために単元構想や授業、その評価を工夫したことで、生徒にとっても保護者にとっても、その成果が実感できた３年間であったと言える。一方で、教員の肯定率は年を重ねるごとに下がっているのが特徴として表れていた。エージェンシーを教科指導の中で育成するという本研究は、先行的な研究・実践が少ない中で行われてきた。したがって、エージェンシーという大きな概念への理解が進めば進むほど、教師が自分の指導法や評価法がその育成に向かっているのかどうかを不安や疑問を抱いていた面がある。その不安や疑問が数値として出てきていたと言えるであろう。ただし、教師が自らの指導法や評価法を振り返り、よりよいものを目指したからこそ、生徒や保護者の肯定率の高さにつながったとも分析することができる。

次に、メタ認知力についてである。エージェンシーの項目とは異なり、生徒の肯定率は、１年次から３年次に向かって少しずつ上昇しているという結果が出ていた。エージェンシーを発揮する上で「現状を把握したり修正したりする能力」を高める必要性を感じたのが、１年次であった。そこからメタ認知力に着目して、指導や評価を工夫していく中で、生徒自身がその成果を実感してきたことが分かる。ただし、エージェンシーに関する項目と同様、教員の肯定率は 70%～80%を行き来しているという結果になっている。こちらも、正解が分からないまま研究実践を重ねてきたことからくる不安が数値として表れていると言える。ただし、そういった教師の試行錯誤が、生徒の成長の実感につながったと分析することができる。

(2)　質問紙調査（ScTN）から

研究主題であるエージェンシーと副主題であるメタ認知力の二つの視点から考察したい。

まずは、エージェンシーについてである。エージェンシーに関する項目は、肯定率が全て上昇していることから、この５か月の取組が有効であったことが分かる。一番変化が大きかったのは、「授業では、『授業を進めるのは、先生ではなくて、自分だ』と思いながら学んでいる」という項目であり、肯定率が １１%上昇していた。各教科の授業の中で、生徒が自己決定・自己選択する場面を意図的に設定したことの成果だと考えられる。ただし、上昇率が高いとは言え、各項目の中で相対的に見た数値が低いのも、この項目であった。生徒にとって必要な内容を教師主導で教える場面は、もちろん大切である。しかし、生徒の課題意識や問いを大切にして、生徒同士の対話を基に学びを深めていく場面をもっと増やしていきたい。

次に、メタ認知力についてである。メタ認知力に関する項目は、若干上昇してものもあるが、肯定率が概ね 80%で変動のない結果となっていた。メタ認知力の育成がエージェンシーの発揮につながると仮説を立て、研究実践に取り組んできたが、３年次に関してはメタ認知力自体の変容を見取ることが難しい結果となった。ただし、肯定率約 80%という数値は、決して低いものではない。そして、５か月という短い期間では変容を実感しにくかったという可能性もある。

4　成果と課題

(1)　メタ認知力を育成する指導について

第Ⅱ部で述べられている各教科におけるメタ認知力を育成する指導の成果と課題をまとめると、以下のようになる。(○：成果、●：課題)

〈題材の工夫に関すること〉

○　日常生活と関連付けた題材を扱い、複数ある情報の中から必要な情報を用いて、数学的に問題解決させることで、問題解決の方向性に見通しを立て、情報を整理し、必要なものを選択して活用する力を身に付けさせることができた。(数学科)

○　歌唱教材、鑑賞教材問わず音楽との出合いを大切にすることにより、学習の意欲付けや課題意識が大きく変わった。(音楽科)

〈導入の工夫に関すること〉

○　社会的事象との出合いの場面で抱いた課題意識を基に、生徒主体で単元を貫く学習問題を設定したり、その解決計画を立案したりする実践を積み重ねたことで、社会的事象や現代社会の諸問題を自分ごととして捉え、主体的に追究活動に取り組もうとする生徒が多く見られた。(社会科)

〈自己調整型の学習に関すること〉

○　自己調整型の学習で生徒自身が仮説を立てたことにより、文章の特徴を客観的に把握するとともに、メタ認知力を発揮して学びの修正を行うことができた。(国語科)

○　自分の意見を積極的に伝えたり、仲間の意見を求めたりする中で、協力しながらミッションをクリアする経験が得られた。また、様々な事柄が結び付き、一つの答えに導かれる過程が楽しいと感じられ、学びの連鎖を実感することができた。(理科)

○　住生活の内容において、モデル家族とその住まいを設定し、班で視点や役割分担を決めて課題解決学習を行った。生徒が主体的に課題解決に取り組み、自らの行動や意識を変えることができる学びの場面を作ることができた。(家庭科)

〈AAR サイクルに関すること〉

○　AAR サイクルを意識した授業展開にしたことで、生徒が見通しを持って取り組むとともに、見通しを修正しながらよりよい活動にしていこうとする姿を見ることができた。(保健体育科)

〈題材の工夫に関すること〉

●　日常場面を題材として扱うとき、課題設定に差異が生じたり、学習のねらいに適さない考え方が出てきたりして、論点が絞れず議論にならない場面がある。生徒の考えを引き出し、問題の解決への方向性の焦点化を図り、共通意識を持たせて学習のねらいに迫るためには、教師のファシリテート力の向上が必要である。(数学科)

〈自己調整型の学習に関すること〉

●　全ての単元・教材で同じ展開の自己主導型学習を行うのは現実的でない。教材における向き・不向きや、教材に合った進め方を検討したい。(国語科)

成果としては、大きく四つ挙げられる。一つ目は、題材を工夫することが、生徒の学習の意欲や課題意識に影響を与えたということである。二つ目は、単元の導入部分を工夫することにより、生徒が主体的に追究活動に取り組むことができるようになったということである。三つ目は、自己調整型の学習を取り入れることにより、課題解決の筋道や方略を自己選択・自己決定することができるように

なり、生徒の主体性やメタ認知力の向上に影響を与えたということである。四つ目は、AARサイクルを意識した授業展開を行うことが、生徒の見通しや修正に影響を与えたということである。

これらは、学校評価において、この３年間でメタ認知力に関する項目が上昇してきていることと関連していると言えるであろう。教師が題材を工夫したり、その題材との出合わせ方を工夫したりすること、自己調整型の学習を導入すること、AARサイクルを意識した授業を行うことにより、生徒たちはメタ認知力を働かせて学びに向かうことができた。

一方、課題としては、大きく二つ挙げられる。一つ目は、教師のファシリテート力を向上させる必要があることである。二つ目は、教材の扱いやその検討を含めて、自己調整型の学習をよりよいものに改善していくことである。生徒が自己選択・自己決定する場面を設けるということは、授業での学びを生徒に丸投げするということではない。生徒が自己選択・自己決定して学びを深めていくためには、教師が意図的なタイミングやポイントで関わっていくことが必要である。実践を重ねれば重ねるほど、その難しさを実感したということが、学校評価の教師の肯定率の低さにもつながっていると考える。ただし、考察でも触れているように、生徒と保護者の肯定率が高いことから、教師が悩みながらメタ認知力を育成する指導を工夫・改善していくことが、生徒の学びの実感につながったという見方もできる。今後も、現状に満足せず、指導やその手立てに工夫を凝らしていく教師集団でありたい。

⑵　メタ認知力を育成する評価について

第Ⅱ部で述べられている各教科におけるメタ認知力を育成する評価の成果と課題をまとめると、以下のようになる。（○：成果、●：課題）

〈タイミングの工夫について〉

○　単元の導入と終末で生徒の考えを言葉でまとめさせる時間を設けた。そのことにより、生徒は音楽を作り上げる過程やその根拠を大切にするようになった。（音楽科）

○　毎授業の始めに、目標を考えさせる場面を設定した。そのことにより、生徒は自己の考えを客観的に見つめ直し、前時からの改善点を考えることができた。（美術科）

〈手立ての工夫について〉

○　ChatGPTやICTを用いた振り返りを行うことで、生徒が客観的に自分の学びを把握することができるようになった。（英語科）

○　AIとの対話や外部人材との対話など、多様な他者と思いや考えを共有したり、意見し合ったりする場面を設定したことで、生徒自身が自己の考えを見直し、深化させることができた。（社会科）

○　自分が設定したゴールへの達成状況について自己評価させたり、仲間の課題や出来栄えについて相互評価させたりすることで、仲間との関わり合いの中で、生徒一人一人が自己の変容に気付くきっかけとなり、主体的な活動につながった。（保健体育科）

〈変容の見取りやフィードバックの工夫について〉

●　メタ認知力が高まったかどうかを、どのような基準や方法で見取るかについて、学年の段階や年間の成長を見通して検討する必要がある。また、見取った内容を生徒の学習改善や教師の授業改善に効果的にフィードバックする手立てを工夫したい。（社会科）

〈振り返りシートの改善について〉

●　生徒が学びの本質を見いだせるように、問題発見・解決の過程で働かせた数学的な見方・考え方に着目した振り返りを意識し、自己調整力の向上につながる振り返りシートの作成や活用について、更に追究したい。（数学科）

成果としては、大きく二つ挙げられる。一つ目は、評価するタイミングを工夫することで、生徒が自己の変容やそのきっかけを自覚し、メタ認知力の育成につながるということである。二つ目は、評価する手立てを工夫することで、生徒が自己の学びや変容を客観的に把握できるようになるということである。

これらは、学校評価において、この３年間でメタ認知力に関する項目が上昇してきていることと関連していると言えるであろう。自己の学びを振り返るタイミングや手立てを工夫したことにより、生徒たちはメタ認知力を働かせて学びを客観的に捉えたり、修正したりすることができた。

一方、課題としては、大きく二つ挙げられる。一つ目は、メタ認知力の変容の見取り方とフィードバックの工夫についてである。本研究における評価は、「学習としての評価」として行っているため、基準というものは設けていない。メタ認知力を数値化することは難しいため、学校全体としては、学校評価や質問紙調査の結果分析を行い、各教科としては、生徒自身の記述の内容からメタ認知力の変容を捉えるという方法を取った。しかし、質問紙調査のメタ認知力に関する項目の肯定率の変容を見取ることが難しかったことから、この能力は短い期間で変容を実感することが難しいものであることが考えられる。課題として出てきているように、長い期間での変容を積み重ねていくことが大切であろう。また、数値化が難しいとは言え、研究実践である以上、メタ認知力を見取る方法について今後も検討していく姿勢が大切であると考える。フィードバックについては、学習者自身が自己の変容を客観的に把握し、修正することが大切にしながら、教師としては、そのフィードバックを次の学びにつなげさせる効果的な関わりや言葉掛けをしていきたい。

二つ目は、振り返りシートの改善である。本研究は、教育研究としてメタ認知力に着目し、それを教科指導の中に反映させながら、研究実践を重ねてきた。教科指導を行う上では、各教科の見方・考え方が大切になってくる。生徒にとって、学びを客観的に把握し、修正できる振り返りシートになっていたとしても、各教科の見方・考え方が発揮されにくいものもあったようである。その教科の本質に迫れるような振り返りシートの作成を今後も目指していきたい。

5　今後の展望

「変化を起こすために、自分で目標を設定し、振り返り、責任を持って行動する能力」「現状をよりよくする力」を教科指導の中で高めてきた３年間であった。その研究実践の中で、メタ認知力に着目して、各教科で育成する指導と評価の在り方を工夫してきた。その成果として、メタ認知力が高まってきたことを生徒が実感していることは、「考察」で述べたとおりである。ただし、二つ検討する事柄がある。

一つ目は、エージェンシーとメタ認知力の関連性を明らかにすることである。メタ認知力に着目して研究を進めるようになったのは、１年次研究の成果と課題がきっかけであった。しかし、学校評価の結果としては、３年間を通してエージェンシーに関する肯定率が高かった。したがって、メタ認知力を育成したから、エージェンシーが高まったとは言い切れない面がある。

二つ目は、「成果と課題」で述べたとおり、メタ認知力について長期的な視点で捉えていくことである。学校評価の結果としては、メタ認知に関する肯定率は、年々上昇していった。しかし、質問紙調査の結果としては、５月から 10 月ではメタ認知力に関する項目の肯定率に変動が見られなかった。変容を実感するためには、時間をかける必要があるのかもしれない。したがって、今後も継続して研究実践し、各教科における指導と評価の在り方を修正・改善していくことが大切であると考える。

また、本研究を更に進めていくために、もう一つ視点を付け加えておきたい。

今後は、エージェンシーを教科だけでなく、教科以外の場面でも発揮できるようにさせていきたい。

そもそも、エージェンシーとは「ウェルビーイング」の実現に必要とされる力である。ウェルビーイングとは、文脈の中によっては個人のよりよい状態を指す場合もある。しかし、私たちはエージェンシーを集団や社会のよりよい状態のこと指す言葉として捉えている。したがって、教科を通してのエージェンシーの育成が、学級活動や生徒会活動、部活動にもつながるものにしていきたいと考える。本附属学校園が目指す「未来を拓く人材の育成」につなげていくことができるよう、研究と実践を更に重ねていきたい。

お わ り に

愛媛大学教育学部附属中学校　副校長　大川　博司

令和４年２月に開催した前回大会を区切りとして、三年次研究の最終年度に研究大会を催し、授業を公開して研究成果を発表することとなりました。一昨年、昨年と研究を深め、ここに、３年研究の最終年次の研究成果を御報告できますことを深く感謝申し上げます。

令和３年１月の中央教育審議会答申では、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実し、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善につなげることで、「令和の日本型教育」を実現するよう示されています。併せて「令和の日本型教育」において実現すべき教師を巡る理想的な姿が掲げられました。その第一の指標として「学校教育を取り巻く環境の変化を前向きに受け止め、教職生涯を通じて学び続け、子供一人一人の学びを最大限に引き出し、主体的な学びを支援する伴走者としての役割を果たす。」とあります。教師が「令和の日本型学校教育」を実現するために教師に求められる基本的な資質能力を身に付け、多様な専門性を有する質の高い教職員集団として機能するよう、互いに研鑽を積む。まさしく本校が研究推進校として取り組んでいる姿そのものです。

前研究の成果を引き継ぎ、OECD 教育とスキルの未来：Education2030 から「エージェンシー」をキーワードに、2022 年度より「エージェンシーを発揮して、変革を起こす力を持った生徒の育成」を研究主題に掲げ、①生徒が学ぶ力を高めるための指導と評価、②メタ認知を育成する指導と評価について研究を進めてきました。また、本校が先進的に取り組んできた ICT 活用についても授業のみならず、校務においても積極的な活用を目指し、学習ｅポータルを用いた質問紙調査を生徒の変容確認に活用することで、生徒集団の把握、生徒一人一人へのきめ細やかな対応に生かすことができました。その質問紙調査では、「授業では、挑戦と失敗を繰り返しながら取り組んでいる」「一人で学んでいて、解決できない問いや課題も、できるまで自分なりにやり続けている」「授業で学ぶことによって、毎日の生活を自分でよりよくするために、できることが増えている」の各項目で、８割を超える生徒が肯定的に評価し、メタ認知力の高まりを教師も実感しています。今後は、より生徒エージェンシーを高めるために、教科指導のみならず、特別活動などとのつながりを意識して総合的に取り組みたいと考えております。

一丸となって教育活動に取り組む私たち教職員集団（チーム附中）は、ウェルビーイングを目指し、AAR サイクルで研鑽に努めてコンピテンシーを身に付け、教師エージェンシーを発揮しながら生徒の主体的な学びを支援する伴走者としての役割を果し続けます。本研究大会で賜りました貴重な御意見・御指導を次期研究に生かし、これからも時代をリードする教育実践のモデル校として、実践研究に邁進する所存です。

結びに、御後援をいただきました愛媛県教育委員会、愛媛県市町教育委員会連合会、松山市教育委員会、愛媛県小中学校長会、愛媛県教育研究協議会、公益財団法人愛媛県教育会をはじめ、御支援・御助言いただきました多くの方々に心より感謝申し上げますとともに、今後とも、本校の教育推進に御理解・御助言を賜りますようお願い申し上げます。

研究同人及び愛媛大学研究パートナー

校長　大西　義浩　　副校長　大川　博司

教科領域	研　究　同　人	愛媛大学研究パートナー
国語科	兵頭　宣彦、○堀内　賢吾、 渡部　真吾	清田　朗裕、小助川　元太
社会科	江角　紀行、○髙橋　祐貴、 萩山　知治	井上　昌善、鴛原　進
数学科	尾辻　耕一朗、冨永　剛志、 ○新上　理哲	安部　利之、河村　泰之、 觀音　幸雄、原本　博史、 吉村　直道
理　科	沖野　俊也、○山根　典之	佐野　栄、向　平和
音楽科	○吉村　真一	楠　俊明、福富　彩子
美術科	○村上　美樹	秋山　敏行
保健体育科	○仙波　弘行、古澤　龍也、 武田　知佳	糸岡　夕里、日野　克博
技術・家庭科	○薬師神　吉啓	玉井　輝之、森　慎之助
	○土手　佳代	竹下　浩子、藤田　昌子
英語科	○福岡　拓矢、向井　俊博、 目崎　美香	池野　　修、立松　大祐

○…教科主任　　（五十音順）

表紙作品（「青葉写生会」での絵画～水彩～）に寄せる思い

「行く河像と附属中学校」

１年　大前　英梨

初めての青葉写生会で青葉大賞をいただくことができ、本当にうれしく思っています。

当日は曇り空でお昼ごろから雨が降ってしまいましたが、それまでは外から見た校舎や行く河像を描くことができました。実際に、行く河像や校舎を見ながら描くことで、自分がいる場所からの距離やものの見え方が感じられたので良かったです。

私は、この絵を描くときに細かい部分まで色々な方法で表現することを意識しながら描きました。柵は細い筆で一本一本描き、木の部分は明度の違う緑色を点々で描くことで表現しました。今回、絵具に混ぜる水分量の調節が難しかったので、次回からは更に工夫を重ねていきたいです。

中表紙作品（「青葉写生会」での絵画～水彩～）に寄せる思い

「緑のある風景」

２年　賀谷　葵

この風景は、小さい頃から何度も通った公園の風景です。今回選んだ場所は見慣れた景色だったため、親しみを持って描くことができました。昨年叶わなかった外でのスケッチを楽しみにしていましたが、あいにくの雨により、実際に見ながら描くことが叶わず、写真を見ての制作となりました。そのため、細かな線や色合いの表現がとても難しかったです。

後日公園に行き、改めて描いた風景を見てみたところ、反省点もありました。しかし、たくさんの方からの「青葉大賞おめでとう」の言葉をいただき、来年こそは現地に行ってより深く作品と向き合い、心に届く絵が描けるように頑張りたいと思いました。私の絵を見てくださったみなさん、ありがとうございました。

「萬翠荘」

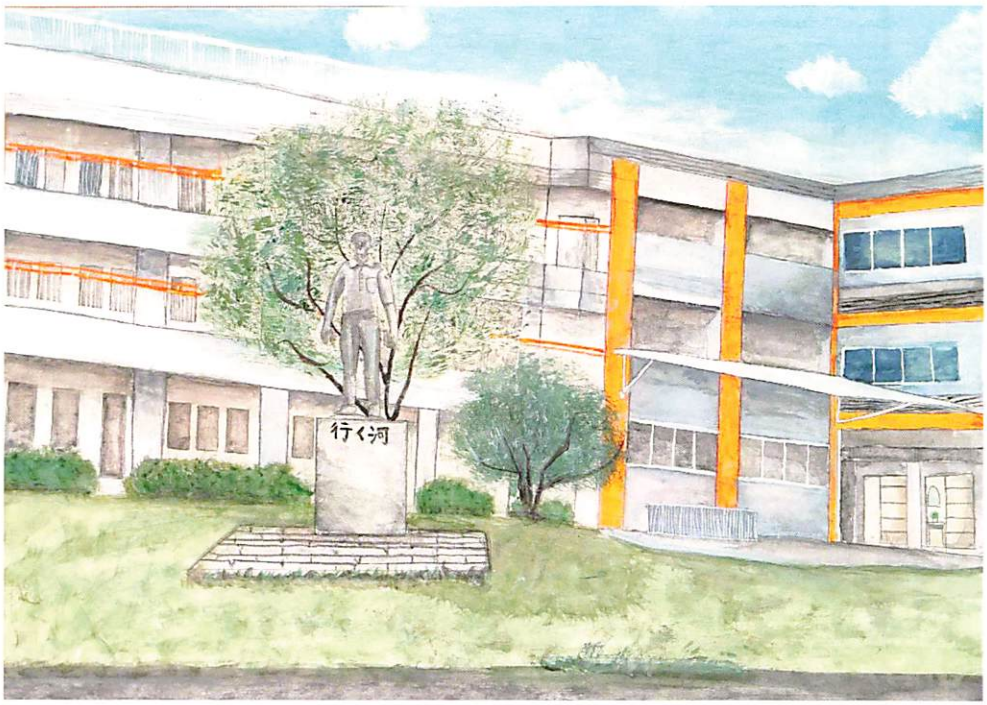
３年　久保田　美有

萬翠荘の歴史を感じる堂々とした雰囲気を出すために、陰影をしっかりつけ、重めの色を多く使いました。瓦や煉瓦、窓も荘厳な雰囲気が出るように、一つ一つ丁寧に影をつけたり、細かく描いたりすることを心掛けました。萬翠荘は建物の表面の線や窓、屋根の装飾など繊細な部分が多かったので、下描きが難しかったです。建物のバランスを取るのも難しく、さらに廊下の部分の奥行きを表現するのも大変でしたが、最終的には描きあげることが出来たので良かったです。難しいところもたくさんあったけれど、いろいろな絵の具を混ぜて複雑な色を表現しようと努力することができて、それがいい経験になって楽しかったです。

2024　愛媛大学教育学部附属中学校研究紀要　第73号
令和７年２月

発行者　愛媛大学教育学部
〒790-8577　松山市文京町３番
TEL　089-927-9371
愛媛大学教育学部附属中学校
〒790-0855　松山市持田町１丁目５-22
TEL　089-913-7841　FAX　089-913-7842

印刷所　株式会社　コピー愛媛
〒791-8023　松山市朝美１丁目１０番 27 号
TEL　089-927-0315　FAX　089-927-0409


行く河